

The Gallery voice

NO-46

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2011.9.16
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

ATTACK!!!

浦田 健二

ふと、「自分の故郷はどこなのだろう？」と思う。生まれは沖縄だが、育ちは殆ど内地だ。広島で小学校までを過ごしたが、アトピー性皮膚炎で死にそうになり、転地療養のため中学は殆ど高知県で過ごした。高2の時に沖縄に戻ってきてから、そろそろ7年になるが、沖縄に対する違和感というのは、未だ根強くある。「故郷はどこ？」広島？…違う。高知？…違う。沖縄？…どうだろ。きっと、故郷がどうか以前に、どこかの地域社会に深く根ざしているという意識自体が低いのかも知れない。

僕は、小・中学校と不登校の時期があり、外で遊ぶ友達もいなければ、近所付き合いもなかった。思春期を迎えてからは、家族との付き合いも希薄になったかもしれない。活動はもっぱらWEB上で、家の中。どこにしようとする自分は自分だという漠然とした思いと、根無し草のような寄り添なさが同居している少年時代だった。

大学時代には、政治的・社会的な作品を扱ったことはなかった。内向的で、空想に基づいた私世界的な作品ばかりだった。しかし、それは僕に限らず、大学の若者の殆どがそうだったように思う。きっと、沖縄や日本の現状を考えるより、自分自身の身の周りの世界を如何に築きあげることが目下の課題だったのだろう。僕自身は、恥ずかしながら社会の状況や歴史に疎い。新聞やTVなどのマスコミは、どれが本当のことを言っているのかまるで分からないし、かと言って溢れかえる情報を一つ一つ検証していくほどの時間と労力はない。ネットでは、自分の興味のある事柄だけを調べて、mixiなどのSNSサイトで友人の近況を知るだけでお腹いっぱい自分がある。

それでも、沖縄にいる限りは基地問題等の報道は日常茶飯事に飛び込んでくる。しかし、政府の対応や沖縄を取り巻く状況に若干の諦めを感じているし、座り込みや抗議活動を行っている人たちに対しては、温度差を感じている自分がある。

画廊沖縄から掲げられた「生命-WAR」というテーマ。そんな自分が今さら戦争について調べて、沖縄を理解しようとするのは、嘘くさい気がした。僕は、僕の立脚点からこのテーマを語れないだろうか…。自分にとっての戦争とは何かを考えてみた。

戦争や暴力、死といったものを考えていく内に、思い浮かんだのは9.11に代表されるテロだった。他にも、地下鉄サリン事件や、イラク日本人青年殺害

事件などが凄惨な暴力としてイメージされた。そういった事件の影響か、自分の中で「暴力による死」というものは、ひどく唐突なものとしてイメージされた。

ふと、Microsoft社のビル・ゲイツ氏が、突然何者かによって顔面にパイ投げをされるというニュースを思い出し、パイ投げでテロを表現できないだろうかと思いついた。顔とは、人間の象徴である。その顔を汚すというのは、相手の人間性を否定することだ。前回の個展、「human ⇄ object」では、人間を白い泥で覆って、人を物に見立てた。表層を変え、人間性を排除する…パイ投げなら、自分の文脈の中で戦争や暴力を語れると感じた。

制作を続けていた5月頃、ウサーマ・ビン＝ラーディンがアメリカの特殊部隊に殺害されるというニュースが飛び込んできた。テロの首謀者を殺害し「正義は成し遂げられた」と語るオバマ大統領と、その一報に歓喜するアメリカ市民の姿に、僕は違和感を覚えた。やり方としてはテロに対するテロの報復でしかないこと。21世紀になっても暴力には暴力で解決していく今の社会の現状を見た気がした。至極短絡的な解決法。コミュニケーションの欠如。今の社会の現状と、パイ投げによるケンカごっこは、レベルは違えど同じもののように見えてきた。



「Encounter」 308mm×460mm アクリルマウント ラムダプリント 2011年

戦争や暴力は馬鹿らしい。そういった意味でのパイ投げという意味もあるし、そのアホなゲームに目の前の大切な日常(生命)がぶち壊されてしまうかもしれない。でも、その時が訪れるまでは、僕みたいなやつは迫り来る危機に気付かないのかもしれない。もし気付いた時には「あっ」という間なんだろうな。

(うらた けんじ／美術家・中学校美術教諭)

「ATTACK!!!」に見る浦田健二の性癖

村田 公人

ここ数年の浦田くんの作品ですが、彼のSな面が、非常によく現れているなあとは思うわけです。Sというのは「サド」とか「マゾ」とかそういう話なんですけど、わかんない人はたぶんないだろうけど、所謂「攻め、受け」の快樂というものが世の中にはあって、「あなたはS(サド)で、私はどちらかと言えばM(マゾ)ね」なんて住み分けたりなんかしてるもんです。

サディスティックな色の強い「ぶっかけ」的な印象もあるもののこの作品が単に性欲むき出しであるとか、ただ彼自身の性欲を満足させるための作品があるとか、そういう稚拙で下卑たイカ臭いアレではなくて、浦田くん自身が作品内で他者に対してどうあるか、そういう基本的な所に彼の性癖、サディスティックさが滲み出ているなあ、と感じるのです。それは表面的に見える攻撃性とは少々質が違います。

浦田くんの大学在学時は平面作品が多く、自らのコンプレックスや皮膚感覚など身体性や実体験に機軸として作品を作っていました。そこから紡ぎだした平面作品なども自虐的というか、自身に対して攻撃的であったように思いますが、とりわけ近年の写真作品などにおいては、自分自身の身体性というよりは、他者を直接攻撃し、他者の皮膚、身体を通して、人間が何なのかを問いかけているように感じます。個から離れ、他者の身体を利用する事で自虐性は薄れ、攻撃性や性癖が露骨に現れているな、とか。自分の願望や好奇心に対してえらく正直になったな、とか。そんな風に思います。

今回「パイ投げ」という事で、いろんな人に、いろんな場所でやりたい放題やっていますが、「作品の為に他人にここまでやっちゃうか」というのがまず正直な感想でした。もちろん了解を得て、意図を理解してもらった上でこの事なんだろうけども、場所によってはパイ投げの現場はモデル本人の家だし、結構踏み込んだな、と思います。本人だけじゃなく、その人の家まで遠慮なく汚しちゃうなんてなかなか出来るもんじゃないでしょ。さらに白い「パイ」はシェービングクリームを溶いて自作したものだそうですが、赤や茶など色の着いているところは調味料です。モデルの男性曰く、香辛料が肌に悪く、しばらくはピリピリしたそうです。かわいそうに。アトピー持ちだったり、本人が一番肌には敏感なくせにやってくれるぜ。しかも撮影に際し本人はほとんど汚れてないという。こういう事をほぼ無意識で平然と相手にやっちゃってる、この感じ。また、作品は写真が多くほとんどが瞬間的な出来事のように見えますが、実際の撮影は長時間に及び、モデルは汚物にまみれたまま放置です。浦田くんはその間淡々と画面にこだわりシャッターを切りまくります。これもなかなかひどいプレイです。ぶつけられたり、汚れたり、作品に見られる単純な攻撃性だ

けでなく、相手の事をほとんど気にせずストイックに美しい瞬間、美しい画を突き詰める彼の姿勢というか、それを地でやっているところが浦田くんのSっぽさ。攻撃性だと思います。



「Decoration」 1344mm×896mm アクリルマウントラムダプリント 2011年

まあでもよく考えたら戦争も同じようなもんですよ。相手の細かい事情なんて一切おかまいなし。自分が信じる「正義」に則り、有無を言わせぬ暴力でもって相手を鎮圧せしめん、ってね。「戦争」が「ぶっかけ」と同じレベルなんていうシニカルなジョークなのか、なるほどね！

ただ戦争とは根本的に違って重要なのは「傷つけていない」という点。いや、パイを投げられた相手の心がどうかまでは知らないですけど、物理的に血が出るとかそういうのはないんです。これは非常に重要で、人体自身はすごく愛でてると思うんです。浦田くんは。あくまで「暴力」と「悪戯」のギリギリのところで「大好きな、面白いモチーフ」であるところの人体が、どう美しく変容するのか。その実験を少年のように楽しんでいるんです。そういう性癖なんです。

(むらた きみと／NHK金沢放送局記者)

浦田健二展によせて

花城 勉

内気であろう青年が挨拶している姿がそこにある。浦田健二との最初の出会いである。彼は教育実習生であり私はその指導教諭の関係であった。一定の標準的な価値や規範を身につけ柔和に対応しているが、それは浦田の持つ一側面にすぎないとわかるにはそう時間はかからなかった。柔和で誠実な一面とは裏腹に、時折、神経質な表情となにか矛盾と葛藤を抱えているような顔をのぞかせた。そして3週間の実習期間、色々と語り合う中でそこから見えてきたものは、外見や第一印象からは想像できない「暴力性」である。もう少し柔らかく表現すると「ダイナミズム」=内に秘めたエネルギーとでも言おうか。

その依拠するものは、沖縄で生まれたものの、幼少時からアトピー性皮膚炎を患い、広島や高知県等で環境を変えながら転地療法を行ってきたことや不登校等の経験。そして毎日皮膚を掻きむしる行為が、精神的な葛藤であるとともに、自己に対する日常的な暴力行為となったであろう。身体に対して日常的に暴力が介在するという、揺らぐことのない不条理な経験が浦田の根底にあり、表現をする上での最大の核となってきたはずである。

一貫して人体をテーマとし、すべての分野を網羅するような多様な作品形態（絵画、写真、映像、インスタレーション、イラスト、Web 表現、音楽制作等）と圧倒的な作品の量は、病から解放される為の手段であり、浦田なりの抵抗の表れであったのだろう。その生い立ちから起因する独特の作風は、自己の中に潜む「暴力性」の投影であり、それは浦田自身の生の姿であり、そこから逃れることなく立ち向い、現実を直視し乗り越えようとすることで、作品のオリジナリティーとリアリティーを獲得している。



「Discord」 896mm×1344mm アクリルマウント ラムダプリント 2011年

英国を中心に、一般的な医療方法として浸透しつつある代替医療の一種にホメオパシーがある。病気の症状と

同じような症状を引き起こす物質を体内に取り入れることで自然治癒力を呼び覚まし、病気を治癒する原理である。「毒を以て毒を制す」とも例えられるが、浦田にも同様な側面が見られるのだ。

前回の個展「human ⇄ object (皮膚と被覆とフェティシズムの世界)展」では、「人間の持つ精神性と物体性の揺らぎ」のテーマのもとに、泥で覆われた人体をモチーフとし、「皮膚」を被覆する行為を通し、「人を物のように見る」という、極めて個人的な世界観を成立させた。存在自体が美しいはずである肉体に、あえてメスを入れるように異物で人体を覆い執拗に攻撃を繰り返すことで、人間の存在そのものを異形化し、全く新しいフォルムや概念を生み出した。



「Juice」 439mm×658mm アクリルマウント ラムダプリント 2011年

主題である人間を執拗に異形化する行為は、過去の記憶の再生であり、その試みはこれまでの偏見や疎外感、理不尽さを肯定することであり、そこから生み出された作品は、実は浦田自身の転写そのものではないだろうか。そこには、無機的な不純の異物が混じり反応した身体感覚が表出されるとともに、自らを治癒していく行為にもなり、その危うさとか儚さが美しい。

2011年3月11日の東日本大震災がもたらした未曾有の惨禍。自然の驚異と人工の脅威である放射性物質が暴力装置となり、甚大な影響をもたらしている現在の状況や沖縄が抱えている諸問題等に対し、アーティストはどう向き合っていくのかという命題と今回の展覧会の「生命— war」という重いテーマがシンクロする。そのテーマに対し浦田は毅然と立ち向かい、「生命— war」=テロとしてとらえ、そのイメージを「予想外の角度から降り掛かってくる暴力」「壊されていく日常」という独特の視点と解釈で、自身の身体との闘いの歴史を踏まえ表現している。それは芸術のもつ可能性を提示するとともに、新世代のもつ創造性と究極のフェティシストが社会と対峙する構図となりとても興味深い。

(美術科教諭・美術家／はなしろ つとむ)

KENJI URATA



浦田健二について

浦田健二氏は1984年沖縄県うるま市生まれ。2010年沖縄県立芸術大学大学院 絵画専修 修了。現在は県内中学校の美術科教師を勤めながら美術活動をしている。

4年ほど前の事だったのであろうか、県立芸大図書館にある展示室（県立芸大付属資料館）のグループ展で一種独特な感性を帯びた作品に出会った。女性の身体を異常と思えるような感覚で描写し、パーツ化され、いたぶられた女体の画面は強烈な印象を残した。その作家が浦田健二であった。彼から差し出された名刺には、首や腕、下半身を失った（もぎ取られた）乳房だけの女体が男の両手親指によって、ギュッと強く押されたドローイングの画像がプリントされていた。一瞬、十数年前におきた神戸の学童バラバラ殺人「酒鬼薔薇事件」を思い浮かべた。ごく普通の青年の風ぼうと、強烈な画面のギャップは展示場を出た後も埋められなかった。

しかし、後の展示会で実作品を前にすると、その類にありがちな猟奇的なニュアンス、鋭利な刃物で切断された肉体という感覚とは異なり、むしろそのパーツ化された身体の部位がまるで独立したモノ（生き物）として取り組まれている。サディズムの要素より、身体への過剰なる執着というか、女体を愛しい対象として、いたぶるように愛撫するフェチシストに思えた。

後日、名刺に記された浦田のWEBサイト

(www.kenjiurata.com)を訪ねた。実にシンプルだ。トップページのファサードは画像がない。英語文字だけで biography(経歴)、archive(記録)、link(繋)のコンテンツがダイアグラムで記されただけである。制作記録(archive)を開くと2007年から2009年の作品がデータとして画像が見れる。ほとんど、日本語の言葉は見つからない。さらに music(音楽)の項目があり開いてみた。伝統的な楽器よる音楽ではなく、音源がアンプの電子ノイズと思われるもの、PCのソフトの楽器、自身の声、街の騒音など生活周辺からサンプリングした音で構成され、絵画のコーラージュのような手法で面白い音楽表現が30数曲もある。実に多面的才能をもった表現者だと思った。

また、本号GV紙で浦田本人が語っているように、幼年期からアトピー性皮膚炎で苦しんだこと。不登校児、ひきこもり、好きな絵やイラスト描き、傷ついた不安定な心、内向きなインターネット少年の時代を経験している。その時代に描いた大量の絵やイラストがもうひとつの浦田のWEBサイト「KEN HOME」(www.aa.cyberhome.ne.jp/~ken-bo)で見ることが出来る。少年浦田にとって、PCやWEBの世界は病と苦しみの中で、唯一希望と救いの「窓」であり、他者とのかかわる「空間」だったのかもしれない。

昨年の浦田3回目の個展「human ⇄ object」(県立芸大付属資料館)は見ごたえがあった。デジタルメディアを駆使した作品群は、今日的な課題を浮上させた良質な作品と受け止めた。さまざまな立場で生活する人々を、頭から灰色の泥で全身を覆い、それぞれの感情を剥奪し、個々の身体を均一な「物化」した画像を提示した。人間が言葉や感情を奪われても、存在というリアルは尊く美しいものだ。そう思った。さらに同室の大画面には6人の男女のシルエットが映し出され、現代人の他者との距離感やコミュニケーションのありようが、ショートムービーで投影された。他者の存在と、肌に触れることの意味、身体性を伴ったコミュニケーションの大切さを浮上させる感動的な作品だった。

今回の企画「生命-War」において、WEB世代の浦田がどのように反応するかとても楽しみだ。「戦争」-「軍隊」-「暴力」-「テロ」-「日常」-「生命」を「パイ投げ」を通して、その「アホさ」、「愚行」を明快に提示した。更に、サディズムとマゾヒズムをエロティックに匂わし、人間の内奥に潜む魔性をあぶり出す。「Twitter」「Facebook」とコミュニケーションツールの広がり止らない。果たして世界はどこへ向かうのか。

(画廊主/上原誠勇)

浦田健二 / Kenji Urata

経歴

1984年うるま市生まれ

2010年 沖縄県立芸術大学大学院 造形芸術研究科 環境造形専攻 絵画専修 修了

<http://www.kenjiurata.com>

2006年「13」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2006年「沖縄県立芸術大学 開学20周年記念 平和祈念公園芸術祭」沖縄県平和祈念資料館（沖縄）

2007年 個展「にんげんばんばん」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2007年「ワイルドジャングル」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2007年 個展「BODYSCAPE」Pink salon GALLERY（沖縄）

2008年「ドローイングコミュニケーション2008」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2008年「第33回 全国大学版画展」町田市立国際版画美術館（東京）

2008年「第19回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展」沖縄県立芸術大学（沖縄）

2009年「ドローイングコミュニケーション2009」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2009年「彫刻の 5・7・5」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2009年「PEACE SUMMER 2009」LOOP A（大阪）

2009年「ちょうちょ結び展 2009」沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー（沖縄）

2009年「貴方を愛するときと憎むとき展」鷹野隆大ワークショップ参加・関連展示 沖縄県立博物館・美術館（沖縄）

2010年 個展「human≠object」沖縄県立芸術大学附属芸術資料館（沖縄）

2010年「第21回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展」[買上] 沖縄県立芸術大学（沖縄）

2011年 個展「ATTACK!!!」画廊沖縄